

解 説

UDC 025.45(042.4)

国際十進分類法 (UDC) について*

(会誌論文に UDC を付記するにあたり)

山 村 良 彦**

On the Universal Decimal Classification Explanation of the UDC —On the Occasion of Applying to Literatures in the Journal—

Yoshihiko YAMAMURA

1. はじめに

日本鉄鋼協会編集委員会では、昭和 47 年からの会誌「鉄と鋼」の掲載論文に国際十進分類法 (以下 UDC という) による分類表示を決めた。

UDC といつてもなじみの薄い人も多いことと思われるが、学術誌の論文表題記載箇所の余白部分に、あるいは目次、号末に理解しにくい数字が羅列してあるのに気が付かれる人も多いと思う。

この数字が UDC と称される国際的に約束された分類標数であり、英国では国家規格として、ドイツでは規格に準ずるものとして取扱われている。わが国では規格となっていないが JIS の全項目に UDC が表示されているのは周知のことである。

また、UDC 普及の度合は Universal の名が示すとおり国内、海外の学術誌に採用され、とくにソ連圏の学術誌の大半に採用されていることなどからもうかがい知ることができる。

そして、今日では科学技術情報が氾濫状況を呈していることから、論文の利用を至便とする分類、あるいはコンピュータを意図したキーワードの抽出添記は著者、編集者の責務とさえ考えられている。

ここにおいて「鉄と鋼」誌に UDC を表示することは、国際誌としての形態を整えることになるばかりでなく、論文の利用を喚起することにもつながり歓迎されることである。

以下に UDC の構成を解説し、実施例を示すことによって UDC の利用者への接近を試みた。

2. 国際十進分類法の生立ち

世界に共通する文献目録の夢をもつ、ベルギー人 Henry La Fontain と Paul Otlet らは、1892 年 Institut Internationale de Bibliographie (IIB) を組織し、1895

年ブリュッセルにおいて最初の国際書誌学会議を開いた。

この国際書誌学会議において十進分類の創始者であるアメリカの Melvil Dewey が 1876 年に発表した “A classification and subject index for cataloguing and arranging the books and pamphlets of library” を母体に、必要な改訂を行えば国際的に使うことが可能であることが認められた。この決議にもとづいて、学術の急速な発展と細密な文献内容とに対処するため、これを展開するとともに各種の符号を用い、1896 年 Manual du Repertoire Bibliographique Universel として国際十進分類法の第 1 版が発行された。その後も Dewey の十進分類法の姿を残しつつ現在の Universal Decimal Classification (UDC) が確立されるにいたつた。

一方、IIB は 2 回の改組ののち現在の Fédération International de Documentation (FID) となり、オランダのハーグに本部を置き、UDC を常に国際的な協力を得て管理している。この FID は UNESCO (United Nation Educational, Scientific, and Organization) とか、ISO (International Organization for Standardization) のような国際団体で、各国を代表する一機関を正会員とする連盟組織で、わが国からは日本学術会議が正会員として加盟している。

3. UDC の特徴

(1) 使用する言語にかかわらず、それらの言語によつて表現される概念を単一、または複合した分類記号によつて、あらゆる知識を一元的に分類する。

(2) 類似概念を集め、類似、不類似の程度に応じて、大から小へと段階的に細分する構成となつている。

(3) 十進法数字を表現の手段として利用しているの

* 昭和 46 年 10 月 29 日受付 (依頼解説)

** 新日本製鉄(株)製品技術研究所

で細分類の展開が容易である。

(4) 知識や、技術の進歩にともない絶えず改訂されながら維持されている。

4. UDC の構成

UDC は数字と若干の記号によつて上位の概念から、狭く限定された下位の概念へと細分化され、類似した概念は近縁な場所にまとめられた体系分類となつている。

この UDC の構成は、主標数と補助数があり、補助標数はさらに固有補助標数と共通補助標数から成り立っている。

ただし、分類表は主分類表として主標数と固有補助標数がまとめられ、補助分類表として共通補助標数と組合せ記号がまとめられている。

分類表に表示される数字は個々での概念に与えられた記号で標数と呼ばれ、小数にならつた読まれかたをする。したがつて、669 は六百六十九とは読まないでロク、ロク、キューと読み、669.14.018 はロク、ロク、キュー、点、イチ、ヨン、点、ゼロ、イチ、ハチと読む。

また標数は普通 3 桁目ごとに・点を入れ桁数の多い標数表示の混乱を避けている。

4.1 主標数

知識の全体を 0 から 9 までの 10 部門 (ただし、4 の部門は現在廃止されているので 9 部門) に分けられている。

- | | |
|------------|--------------------|
| 0 一般事項, 総記 | 5 数学, 自然科学 |
| 1 哲学 | 6 応用科学, 医学, 工学, 農学 |
| 2 宗教, 神学 | 7 美術, 写真, 音楽, 娯楽 |
| 3 社会科学 | 8 言語および文学 |
| 4 (廃止) | 9 地理, 伝記, 歴史 |

つぎに、この中の各部門を 10 以内の項目に分け、さらにこの操作を繰り返しながら細分を展開していく。しかし、海洋工学、とか産業機械といった広範な領域にまたがり、部門範囲の不確定な事項に対しては独立した分類位置が与えられていない。また進歩の動向の不確定な場合や、他と重複を生ずる場合には細分されていない。

これに対し、名称、用語あるいは実体が同じでも、例 1、例 2 に示すように取り扱いや考え方がまったく違う場合には、別々の分類位置が与えられ、細分される。

- 例 1 669.1 鉄 (冶金学)
 546.72 鉄 (無機化学)
 549.261 鉄および鉄鉱物 (鉱物学)
 553.31 鉄含有鉱物 (鉱床学)
 622.341 鉄鉱石 (鉱山工学)
- 例 2 548.53 再結晶 (結晶学)
 620.186.5 再結晶 (ミクロ試験)
 621.785.374 再結晶処理 (熱処理)
 669-174 再結晶させた (冶金学)

4.2 主標数の展開

主標数の細分は例 3 に示すように概念を階層的に展開する。

- 例 3 6 応用科学, 医学, 工学, 農学
 66 化学工業
 669 冶金, 合金
 669.1 鉄および鋼
 669.18 製鋼
 669.184 転炉法, 転炉精錬の原理
 669.184.2 塩基性転炉法
 669.184.24 転炉への衝風供給
 669.184.244 衝風の組成および方向
 669.184.244.6 酸素富化衝風
 669.184.244.66 酸素富化上吹き衝風

ただし、分類表にはテン、ハイフンを境として、例 4、例 5 に示すように標数を略して表示されていることが多い。

- 例 4 620.17 材料の機械的性質の測定, 強さ試験
 .171 一般事項; 試験方法, 試験条件とその影響
 .171.5 光弾性試験
 .172 引張試験
 .22 弾性限度, 弾性係数, 降伏点, 耐力
 .251 低温, 高温での試験, クリープ試験

- 例 5 669-4 冶金的製品および、半製品の形状
 -41 平らな製品
 -412 鋼塊, スラブ, ビレット
 -413 厚板

例 4 において、.171 は 620.171 を、.251 は 620.172.251 を示している。同じように、例 5 において、-412 が 669-412 を示していることは明らかである。

4.3 主標数の平行的な細分

非鉄冶金のように、鉱石から金属の生産過程において類推可能な場合は平行的な細分を行なう。ただし、鉄はこの原則によらない場合が多い。

- 669...1 製錬および加工に関する総説
 ...3 鉱石からの各種金属の分離
 ...4 精製, 精錬, 回収
 ...5 合金
 ...6 加工, 仕上げ加工
 ...7 応用, 用途
 ...8 被覆またはめつきとして用いられた金属

この平行的な細分を銅 669.3 ならびにアルミ 669.71 について示すと例 6、ならびに例 7 のようになる。

- 例 6 669.347 銅の電解精錬
 669.35 銅合金

	669.369	銅への被覆
	669.386	銅めつき
例 7	669.714.7	アルミの電解精錬
	669.715	アルミ合金
	669.716.9	アルミへの被覆
	669.718.6	アルミめつき

この平行的な細分を行なうとき注意したいのは金属によつて点の移動が行なわれることである。すなわち、分類表には蒸着めつきが 669...861 としてあるにもかかわらず例 8 に示すように 669.26 のクロムに連結するときは 8.61 となり、669.3 の銅に連結するときは 86.1 となることに注意しなければならない。

例 8	669.268.61	クロムの蒸着めつき
	669.386.1	銅の蒸着めつき

5. 固有補助標数

固有補助標数は UDC に多次元性を付与するために作られたもので -... (ハイフン), .0... (テンゼロ), '... (アポストロフィ) の別がある。

5.1 -... (ハイフン固有補助標数)

ハイフン固有補助標数は例 9 に示すように、広範な領域に共通な概念に対して用いられている。

例 9	62-52	自動制御, 自動操縦
	621.771-52	圧延機の自動制御
	648.23-52	洗たく機の自動制御
	664.7-52	製粉所の自動制御
	669.162.23-52	熱風炉の自動制御
	697.4-52	温水暖房の自動制御

5.2 .0... (テンゼロ固有補助標数)

テンゼロ固有補助標数は、限定された部門のみに生ずる下位概念を示す場合が多い。したがつて例 10 のように、.0... が同じ標数であつても部門が異なれば全く別の意味を表わす。しかし、.0... の中でも限定された範囲内においてではあるが例 11 のように比較的広範囲な項目に共通して適用されるものがある。

例 10	621.735.042	機械ハンマー, プレスによる鑄造
	621.746.042	遠心鑄造
	621.785.042	熱処理炉の操作, 装置
	621.791.042	溶接棒, および電極線
例 11	621.735.019	鍛造欠陥
	621.746.019	鑄造欠陥
	621.785.019	熱処理欠陥
	621.791.019	溶接欠陥

5.3 '... (アポストロフィ固有補助標数)

アポストロフィ固有補助標数は、他の多くの補助記号と違つて細分に用いるのではなく、化合物や合金のように 2 つ以上の成分から合成されているものに用いられる。そして、この標数を用いる場合は例 12, ならびに例 13 の末尾に示すように共通する上位の標数を省略す

る。

例 12	546.723	三価の鉄, 第二鉄塩
	546.226	六価のいおう化合物, 硫酸塩
	546.723'226	硫酸第二鉄
例 13	669.15	鉄合金
	669.15-194	低炭素鉄合金
	669.24	ニッケル
	669.26	クロム
	69.15'24'26-194	低炭素 Ni-Cr 合金鋼

この場合、18-8 ステンレス鋼のように組成比が明らかで Cr が Ni より多い場合は 669.15'26'24-194 とするのが正しい。解説には“組成が不明確な場合には標数順に配列”としてある。しかし、合金鋼素材を扱うものにとつて組成比が不明確な場合は多く、組成がわかつていても標数の小さいものから順に配列される方が、分類にも検索にも誤りは少ないようである。

6. 共通補助標数

共通補助標数は、主分類表に示されるすべての項目に対して共通しておこり得るような概念がまとめられている。

6.1 言語, 国語の共通補助標数, 記号, =...

この標数は文書の取扱い言語が何語で書かれているかを分類するもので、例 14 の = 記号以下の標数が言語を示している。またこの標数は各種の補助標数の最後につける。

例 14	669.1(021)=956	日本語で書かれた鉄鋼便覧
	840=40	英語で書かれたフランス文学

6.2 形式を表わす共通補助標数, 記号 (0...)

この標数は文書、刊行物の形式または性質を分類するに用いられ、例 15 の () 内の 0 を含む標数が形式を表わしている。

例 15	621.791(03)	溶接ハンドブック (辞書形式)
	622.785(048.1)	焼結文献集
	621.771(083.7)	圧延機仕様書
	669.1(091)	鉄鋼技術史

6.3 場所を示す共通補助標数, 記号 (...)

この標数は文書の内容が場所的制約を持つているとき、その地理的区分を示すのに使い、例 16 の () 内

例 16	622.341.1(932)	ニューカレドニア鉄鉱石
	621.74(521.1)	東北地方の鑄物
	662.664(71)	カナダ炭 (コークス用炭)

6.4 人種, 民族および国籍の共通補助標数, 記号 (=...)

この標数は主分類標数の概念が、どの民族、またはどの国籍に属するものであるかを区別するのに使われる。

民族分類の細分は 6.1 に示した言語、国語の共通補助標数に () を付けた形で示される。したがつて例 17

において言語標数は末尾に記入される約束から日本語を話すドイツ人とはならないことに注意する。

例17 (=956=30) ドイツ語を話す日本人

6.5 時の共通補助標数, 記号 "..."

この標数は年代や時間の条件を示すのに使われる。年代は原則として西暦を用い, 例18のように示す。なお, 西暦紀元前は- (負号) を用いて示す。

例18 "1971.12.08" 1971年12月8日
669.1(058) "1970" 1970年度鉄鋼年鑑

6.6 補助分類としての文字, 名前, 番号

UDC 主標数にはわずかの例外を除いて個有名詞は使われていないが, 個別に細分したいときは例19に示すように文字, 番号を付してもさしつかえない。

例19 92 Kuniichi Tawara 俄国一の伝記
669.162.2 Nagoya No. 3 名古屋3高炉
669.14.018.582 MK MK 磁石鋼

6.7 観点を示す共通補助標数, 記号 .00...

この補助標数は例20に示すように主分類に共通する観点がまとめて取扱われている。しかし, 実際には例21に示すように大半の観点は主標数または固有補助標数に含まれている。したがって, この標数の乱用は目録に混乱をおこすので, 主標数にも固有補助標数にも, 正確に適合する観点がない場合にのみ使用される。

例20 669.184.001.57 転炉の構型実験
620.17.006.25 材料試験研究室
621.365.2.007.2 電気炉技術者

例21 669.1.002.68 くず鉄 (廃物としての観点)
669.1.004.8 くず鉄の利用, 回収, 再生
(使用上, 作業上の観点)
669.1-493 鉄の削りくず
(鉄くず形状の観点)
621.91-493 鉄の削りくず
(切削加工の観点)
658.567:669.1 くず鉄の管理, 利用
(管理技術上の観点)
621.745.44 金属くず, 削りくず
(鑄物溶解に用いる添加物)
669.1.054.85 くず鉄の冶金的利用
(冶金学全体)
669.183.23 平炉のくず鉄操業法
(平炉操業上の観点)
669.184.232.32 くず鉄添加による転炉冷却
(転炉の冷却剤として)

くず鉄に対して上記のように数多くの標数が与えられており, くず鉄の冶金的利用に対して, .00の観点を示す共通補助標数から, .002.68ならびに, .004.8を使用することができないのは明らかである。

7. 標数の組み合わせ

科学技術文献の内容が単位概念で分類できることは少ない。つまり科学技術文献は単位概念の組み合わせによつて構成されていることが多い。

UDC では, このように複合した概念に対して, つぎのような記号で分類標数を組み合わせることができる。

7.1 単なる集合, 並置, 記号 + (プラス)

不連続な単位概念の集合において, 2つ以上の単位概念を結びつけるには例22に示すように, + (プラス) の記号を用いる。

例22 622+669 採鉱と冶金
(52+73) 日本とアメリカ
669.24+669.26+669.293 ニッケルとクロム
とニオブ

注: ニッケル, クロム, ニオブを単体として考えるときに使われる。

7.2 単なる集合, 連続, 記号 / (ストローク)

分類表上で一連の連続標数に該当層する概念は, 例23のように当該概念の最初の標数と最後の標数を/(ストローク)で結びつけることができる。

例23 669.21/.23 貴金属 (金, 銀, 白金, イリジウム, オスミウム, パラジウム, ロジウム, ルテニウム)
621.771.24/.26 条鋼 (棒鋼, 線材, 形鋼, レール, 矢板) の圧延ならびに圧延機

/記号を用いるとき, 分類標数の共通部分は3桁目ごとの点をさかいに省略する。つまり貴金属の標数は669.21/.3とはしない。

7.3 複合, 関連, 記号 : (コロン)

2つ以上の概念が関連をもつ場合, 例24に示すように単位概念の標数の間に: (コロン)を用いて新しい概念を表す。なお: (コロン)と+ (プラス) 記号を比較して, どちらを使うか疑問がある場合は結合記号として: (コロン)を使う。

例24 621.774.2 : 621.791.42 鋼管の鍛接
543 : 546.26 : 669.14 鋼中炭素の分析
669.141.25 : 621.744.3 鑄鋼鑄型

7.4 角かつこの使用, 記号 [] (角かつこ)

角かつこ: 記号は, 一般にはほとんど使われないが, つぎに示すような場合に使用する。

(1) 完全な複合概念で, 例25に示すごとくいずれかの概念が従属的で分類の対象とならない場合に使われる。

例25 669[53] 金属物理
つまり, 金属の熱力学 536.8, 磁気性質 538.2, 物性 539 というように内容が細部に分けられるような物理概念に比重でかる場合には [] は使われない。

(2) 組み合わせられた標数が数多くあるとき、例 26 に示すごとくその一部をまとめ、他との関係を明らかにする場合に使われる。

例26 669.14-147:539.4.014 [669.293+669.295+669.296]

連鑄鋼材の機械的強度に及ぼす Nb, Ti, Zr の影響
この場合は Nb, Ti, Zr の 3 元素が合金としてではなくそれぞれが単独で連鑄鋼材の機械的強度に関して影響する場合などに使われる。

8. UDC の資料

UDC によつて文献の内容を標示する分類表は FID の Central Classification Committee が管理の中心となり、UDC が正しく改訂増補されているか否かを監視している。したがつて、UDC の出版に対する著作権はとくにきびしく、わが国では正会員である日本学術会議の指定を受けた日本ドクメンテーション協会が当つている。以下に鉄鋼関係者に必要と思われる分類表を列記する。

- ① 国際十進分類法、簡略日本語版 [改訂第 3 版]: FID No. 436, 1967, 日本ドクメンテーション協会発行
- ② 国際十進分類法索引; 1970, 日本ドクメンテーション協会発行
- ③ UDC 日本語中間版, 国際第 6 版, (ルースリーフ式) 日本ドクメンテーション協会発行
- ④ UNIVERSAL DECIMAL CLASSIFICATION Special Subject Edition for Metallurgy with Index FID No. 362; ISI Special Report No. 84: 1964, The Iron and Steel Institute 発行
- ⑤ UNIVERSAL DECIMAL CLASSIFICATION Complete English Edition, Fourth International Edition (BS 1000); British Standards Institution 発行
- ⑥ また UDC の改訂増補は FID から Extensions and Corrections to the UDC として発行されている。

なお UDC についての詳細を必要とする場合は、下記へ直接問合せられるのがよい。

〒112 東京都文京区小石川 2 丁目 5-7

佐佐木ビル内

社団法人 日本ドクメンテーション協会

電話 08-813-3791

9. UDC 分類の実際

UDC 分類は概念分類であり、まず概念の一致が求められる。したがつて、UDC 分類表全体の概念構成がどのようなになっているかを十分に知つておく必要がある。

実際に文献の内容を分類する場合は、分類すべき対象からいかなる概念を選択するか。そして、その概念が分類表の中のどの標数に対応するかを選択すべきである。かりにも、表現されている言葉に拘束されると概念の選

択に誤りを生じ、対象とする概念から遠ざかつた分類となつてしまう。

ここに「鉄と鋼」Vol. 57, No. 12, Oct. 1971 の諸論文について簡単な解説を加え、分類の実際について述べる。

ただし、①②……の数字は説明のために記入したもので分類に使用してはならない。

(1) 高炉の溶融帯・羽口間の動特性の単純化モデルによる近似解析

① 669.162.28: 溶鋳炉操業過程の研究

これは高炉の溶融帯・羽口間の動特性に対して与えた標数ならびに観点。

② 519.283 予言の補助手段としての数理統計の応用

これは、モデルによる近似解析に対して与えた標数と観点。

(2) カルシウム複合合金による溶鋼の脱酸、脱硫について

① 669.891.5: カルシウム合金

これは、669...5 が合金を示すので 669.891 のカルシウムと結びつけてカルシウム合金を示した。

② 669.046.558.6: 複合脱酸剤

この標数は 669 の固有補助標数であり、もし製鋼の場合であれば「669.18 製鋼」と結びつけて「669.18.046.558.6 製鋼における複合脱酸剤」とするのがよい。

③ 669.14-157: 溶鋼

これは「669.14 鋼」に「669-157 溶融された」という固有補助標数を結びつけた。しかし、鉄冶金を取り扱うものにとつては出現頻度の多い単語であり一般には溶鋼を特に強調したい場合にのみ表示するのがよい。

④ 669.046.551 脱酸

⑤ 669.046.546.2 脱硫

④⑤ の標数に対しては ② と同じことがいえる。

(3) 転炉火点の界面積について

① 669.184.244.66: 酸素富化上吹転炉

② 541.126 反応帯

この標数は、火点の界面積という言葉に対して、自発的反応、着火を含む概念に置換えた。

(4) 急速加熱焼入れされたニッケル、クロム、モリブデン浸炭鋼の機械的性質

① 621.785.014.5: 急速加熱熱処理

この標数は、文献内容に温度条件を変えることによる熱処理効果が取扱われてことから、「621.785 熱処理」と 621.78 に与えられた固有補助標数「.014.5 急速加熱」を結びつけて表現した。

なお、つぎに示す ② と同じように「669-151.62 急熱された鋼」としても誤りではない。

② 669.14-156: 焼入れされた鋼

この標数は「69.14 鋼」に固有補助標数「669-156 焼

入れされた」を結びつけて表示した。なお①で述べた 669-151.62 とを結びつけ「669.14-151.6-156 急熱され焼入れされた鋼」としても差支えない。しかし、このように分類を複雑とすると検索索引するときに不便となる。したがって索引観点となる概念は、たとえ固有補助標数であつてもできるだけ別記するのが便利であるといえよう。

③ 669.15'24'26'28-194 : Ni-Cr-Mo 鋼

この標数は「669.15 鉄合金」, 「669.24 ニッケル」, 「669.26 クロム」, 「669.28 モリブデン」の 669 を略して 4・3 の規則に従い結びつけるとともに「669.15-194 低炭素鉄合金」を高炭素鉄合金と区別する意味から表示したものである。

④ 669.14.018.298 : 熱処理用鋼 (機関機構部品用構造用鋼)

③において材料成分を標示したが、材料の性質からも分類しておくのがよい。そこで 669.018.298 を結びつけて機械構造用熱処理鋼をつけ加えた。

⑤ 669.141.31 浸炭鋼

④とは別に製造方法による鋼の分類があり、必要に応じて標数を与えておくのがよい。

(5) 少量粉末試料の組成分析における X線マイクロアナライザー

① 543.422.8.063 : X線マイクロアナライザーによる微量分析

この標数は「543.422.8 X線吸収分光分析」を X線マイクロアナライザーと解し、「543.063 微量分析」を結びつけた。

② 669.1-492 鉄鋼の粉末

669.1 は単に鉄というだけでなく鉄冶金における全ての要素を含む標数であり、この標数に固有補助標数「669-492 粉末」を結びつけて表示した。

(6) 鋼の水素脆化現象 (研究の歴史的考察ならびに現状)

① 669.14(091) : 鉄鋼についての歴史記述

「669.14 鋼」の標数に共通補助標数 (091) を結びつけて表示した。

② 539.56 : 脆性

③ 669.788 : 水素

水素は無機化学の項に 546.11 でも示されるが、この報告の水素は冶金学における夾雑物として表示した。

④ 620.193.46 内部亀裂欠陥

水素脆性は白点、遅れ破壊などの内部欠陥をとまなうことから欠陥としての標数は是非とも付加しておくべきである。

(7) 製鋼技術の発展に伴う管理分析の維持と問題

点。

① 669.18.012.1 : 製鋼における測定, 管理, 制御
この標数は「669.18 製鋼」に「669.012.1 測定, 管理制御」の固有補助標数を結びつけて文献全体の構成を表示した。

② 543〔65〕 分析〔管理技術として〕

543 の分析に「65 管理技術」を〔 〕で結んで管理分析を表示した。

(8) 工業計器に関する鉄鋼標準案

① 669.1.012.1 : 鉄鋼の計測

この標数は(7)と同じ観点から補助標数, .012.1 を結びつけて報告の全容を明らかにした。

② 389.6 : 規格統一事業

③ 621.317 電気測定, 電気計器

この標数は報告の主体が電氣的計測装置を主体としていることから表示した。

以上 8 題目について分類の実例を示したが、分類標数は表題に示された言葉の順に配列したきらいがあるが、文献の内容に応じ、比重の大きな概念から分類することが好ましい。

10. む す び

UDC の生立ち, 特長, 構成そして実施例について記載したが、UDC が単なる論文の表示記号として眺められるのでは何の目的もはたしえない。

UDC にかぎらず分類は論文が発表されたときよりも、むしろある時間を経過して必要とする論文を遡及的に探索し再度利用するために付されるものである。

したがって、ドクメンタリストはもちろん、個々の論文利用者においても、常時監視の必要ある学術誌については表題と UDC をカードに記入し、蓄積しておけば数年を経ずして独自の索引ができ、研究を加速するばかりでなく重複研究を避けるなど研究を効果的に展開させることは明らかである。

なお鉄鋼協会では昭和 37 年 (第 48 巻) 以降の諸論文を UDC 分類カード (ただし昭和 46 年まで抄録なし) として整理しており、また英国鉄鋼協会では各国の鉄鋼関係論文を ABTICS (Abstract and Book Title Index Card Service) の名称で鉄鋼技術に関する網羅的な UDC カードを発行しているの、これらを利用すれば一層充実した索引が整うことは明らかである。

いずれにせよ UDC が諸賢の身近なものとなつて、情報過多な時代に対応した情報利用の一翼をになうことができれば幸である。